

野上豊一郎

大学講師時代の
夏目先生

大学講師時代の夏目先生

先生は嘗て自分に、「大学の講義を万年して居れば、真面目な人ならきつと神経衰弱になる」と云われた事がある、講師時代の先生の態度は全く此の一言に尽きていた。先生はそれほど真摯で、且つ厳格であつた。

当時は吾々は毫も先生を文学者としては認めていず、私自身は九州の中学校にいたため、先生の熊本時代に龍南会雑誌へ出した俳句を知っている位であつたが、英学者として秀れているのは誰もよく知っていた。吾々は先

生を歓迎した。併し教室での態度は、前にも云った通りキチンとしていて、試験問題などは一問も苟もしない底のものであったから、皆ひそかに怖れをなしていた。其時丁度藤村操の事が起つて、先生のそれに就ての挿話があるから鳥渡話そう。

先生は何しろ生徒の下読みをして来ないのを嫌われたが、藤村は自殺する頃二度ほど怠けた。最初の日先生から訳読を当てられたら、昂然として「やって来ません」と答えた。先生が「何故やって来ない」と聞き返すと、「やりたくないからやって来ないんです」とか何とか答

えた。先生は怒って「此次やって来い」と云って其日は済んだが、其次の時間に又彼は下読みをして来なかつた。すると先生は「勉強する気がないなら、もう此教室へ出て来なくともよい」と大變に叱られた。するとその二三日後に藤村の投身のことが新聞に出た。その朝、第一時間目が先生であつたが、先生は教壇へ上るなり前列にいた学生を捕えて、心配そうな小さな声で、「君、藤村はどうして死んだのだ」と訊ねられた。その男が「先生心配ありません。大丈夫です」と云ったら、「心配ない事があるものか、死んだんじゃないか」と云われた事がある

った。先生の心算では、あの時手ひどく叱った故彼が自殺をしたのじゃないかと、ふと思ったのだったそうだ。後年小説の中で、藤村の死に対する先生の理解を示されたが、藤村についてはそんな挿話があったのである。

其頃の先生の様子は一体に高襟で、高いダブルカラに、磨き立てのキツドの靴の、尖の細い踵高な奴をはいて、歩きぶりから一種のリズムを持って居た。出席簿を読むにもすべて英語を用いて、*Mr.* ——と云う口吻を吾々はよく真似たものである。併し高襟とは云っても、毫もきざな分子はなく、随分馬鹿にされた先生もあつたが、生

徒の嘲弄の的には絶対にならなかつた。それだけ先生は所謂こわもてであつた。

その頃の講義は、平生時間がないため、暑中休暇中に大半を作製されたようである。草稿というのはアヒ版の洋罫紙に、釘の頭で突いたような細字を、初から終まで隙間なく、行にも何んにも関係なしに並べた奴を、毎日一二枚づつ持って来られた。

其頃の先生は生理的に陰悪を極めた時代で、大神経衰弱の絶頂であつた。而して教室に於ける態度も、如何にも苦るしそうであつた。青い顔で、物を云う前にはき出

すような「エーツ」と云う長い太息をつかれ、食指を嘗めては机の上に字の様なものを書く癖があつた。吾々は先生がそれに依つてどれだけ塵芥を甜められることかと心配した位である。而して頤をしやくつては講義を続けられた。

聞く処によると、先生は其頃、教授室にはめつたに入らなかつたそうである。そのためいつも教室へ、オウヴア・コウトとステツキと帽子を持ち込んで、卓上に置かれた。而して二時間ぶつ通して講義を終ると、其儘真つ直ぐに歸られた。たまに教授室へ入つても、椅子を横に

ねじ向けてほかの人の存在におかまいなく、ひとりで本を読んで居られたそうである。洋行後ひどく陰鬱になって、人間ぎらいになっていたのであろう。

これは最近或る人に聞いた話であるが、先生がよく図書館に入って行くと、教授閲覧室の隣が事務室に当たっていて、談笑の声が洩れる。それが先生の神経に触るので、顔色をかえて「静かにして呉れないと困る」と抗議を申込まれた事があるそうだ。併しそれでも止まなかつたので、学長にあてて手紙で訴えたそうである。それから又其近処で医科の実験用の犬が泣いてそれで神経を痛めら

れた話は、朝日の入社の際に図書館攻撃となつて現われた程である。何しろ自分が真面目に物を云つてゐるのに、他人が真面目で相手にならないので、ひどく怒られたのに相違ない。

学校は殆んど休まなかつた。前にも云つたように謹厳そのもので、学生のだらしないのを非常に気にされ、高等学校の時もよく頬杖をしているのを叱つたが、大学でも嘗つて左手のない男がいて、恰も懐ろ手をしているかの如く見えるので、或る日つかつかと其男の側に来り、「おい君、手を出し給え」と咎められた。其時生徒は黙

って顔を赤めただけで、先生も沈黙して居られたが、あとから手のないのを聞いて非常に気の毒がられた事もある。

それからもう一つ覚えている事実で、或る時先生の授業中に、坪井学長が入って来られたけれども、先生は知らん顔をして講義を続けられた事がある。坪井さんは傍まで行きかけたが、何と思ったか戸口まで退いて終るのを待っていた。而して授業が終ると初めて用向を述べたら、先生は簡単に「ああそうですか」と云ったぎりであった。

先生の講義で吾々が第一に利益を与えられたのは、文学の研究又は鑑賞の態度に色々な暗示を与えられた点にある。自ら高く持するスカラテイクな態度や、西洋人の受売なぞは毫もなく、しっかりと自分の態度を定めて、しかもそれを生徒に押つけるような事がなかったのは、他に得られぬ貴重な教訓であった。それを除いて私には大学にいた価値はないとすら考えている。

木曜会は其頃からあった。寺田さんを主として、野村傳四、中川芳太郎、野間眞綱等の諸君、虚子、四方太の諸氏及び吾々後輩がよく集った。雑談は少く、作物を持

ち寄つて、てんでに悪口を云い合つた。鈴木の諸作、森田の煤煙なぞも其処で読まれた。先生自身も自作を朗読された事がある。

先生の皮肉は其頃が最も激しかった。併し決してあてこすりに墮するような事はなかつた。教室ではさほどでもなかつたが、家では新聞雑誌記者がもてあました。いつかもある雑誌記者の恨を買つて、読売紙上に一段半も悪口を書かれ、其時居合せた私までも引合いに出された事がある。何しろ今の文壇の通弊たる、新聞雑誌記者にお世辞を云う事などは絶対になかつた人である。されば

とて強いて反抗的に出るのでもない。只調子を合せる必要がなかったから合せなかったのである。先生は最後まで、記者連には厄介な人物として残っていたらしい。

（談―新小説第二十二年第二号より）

日本文学電子図書館

大学講師時代の夏目先生

著 者：野上豊一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館